

助詞「を」の本来

——『あゆひ抄』『平家』書入詳解——

内 田 賢 徳

はじめに

一 上古にてはあはれといふ心をふくめる詞

二 「を」の軽重

1 「輕きを」

三 「を」の輕重

2 「重きを」

四 釈義の適用

五 「輕きを」の二態

富士谷成章『あゆひ抄』『平家』に展開されるあゆひ（助詞）ヲについての言説は、今日のこの助詞を対格の用法を基本として説く文法學説と対立的である。対格から説こうとするとき、この助詞は日本語に特徴的な用法、「湯をわかす」において困難を抱える。目的用法、特殊用法などと称しても、所詮論理はきこえない。「あはれ」といふ心」に出発して展開される『あゆひ抄』の説をそうした今日的な學説の批判の媒介として取り上げるとき、後継者たちに伝授されてきた講述は、言説解析の何よりの助けとなる。その一斑を見て、助詞ヲの本来性を明らかにする。

はじめに

富士谷成章『あゆひ抄』は、安永七年（一七七八）の刊、近世の主要な文法書として、本居宣長『詞玉緒』（天明五年（一七八五）刊）と並ぶ。その内容と文法観は、山田孝雄を介して近代の文法研究にも継承され、殊に森重敏、川端善明の文法論へと展開してきている。また、その著作については、竹岡正夫によって詳細な解明が行われている。しかし、現在の文法研究一般は、殆どこれを顧みるところがない。近代以前ということをも、方法的な過去として捉えるところにその理由があるかと思われるが、今、文法研究が用法を微細に記述することへと傾く中で、批判性を欠いてきていることも一因であろう。

『あゆひ抄』については、前近代性に位置づけられると共に、その直接的な継承、即ち成章の子御杖が受けているところのミステイシズムという評価が影響している面が否めない。その点はむしろ言語思想の研究といった分野に委ねられて、直接的な継承が単にそのように切り捨てられるべきものかどうかの検討は、文法研究の側であまり試みられてこなかったように思う。

小稿は、助詞「を」、「あゆひ抄」「乎家」に即して、架蔵の『あゆひ抄』書入本（福田美楠書入転写本、図参照）

を読み解くことでそれを試みる。もとよりそれは富士谷学派と称してよい系譜についての研究ではない。そこに見られる、近代以前の文法の中に、現在の文法研究に資する批判的な内容を見出すためである。

文法批判とここに言うのは、何か特定の文法研究を貶めようというのではない。文法と称している現象の中で、私たちが遂行していることは、本当はどのような経験なのか、それを反省的に取り出してみること、つまり批判とは、ここで Kritik に他ならない。

『あゆひ抄』書入本



一 上古にてはあはれといふ心をふくめる詞

「家」は、『あゆひ抄』が「あゆひ」を分類する項目の一

つ、現代の用語で言えば、「あゆひ」は助詞・助動詞・接

尾語類に相当し（あゆひは、脚結、袴の裾を括る紐）、

「家」は助詞のうちの文の意味（詠・疑・願・詠・禁を
表す類を除いた、文節相互の關係の意味を担うものを、幾
つかずつ類別して括つたものであり、「家を」には、「を、
てを・とを・にを、ものを、をは」が属する。

それら小類の前に總論のようにして、次のように説かれ
る。

凡^レを^レは、上古にては、あはれといふ心をふくめる詞な
り。後世にはを^レやといふ脚に、これに似たる心のこれ
り。又うれしきかなや何々をと、文にかけるも、いに
しへのおもかげある詞也。次にいふおもきを^レなど此
心にちかし。（適宜濁点等を付して引用、以下同じ）

「上古」とは、同じく富士谷の『かざし抄』（明和四年
（二七六七）刊、かざしは副詞類を指す）によれば、「神世
より萬葉集の頃まで」を指し、つまり我々の区分では上代
に相当する。なお、文学史的区分としての神世、神代は、
昭和の戦前期までであった。「あはれ」の心、つまり意味と
は、「句の末におきてうちながめたる」（かざし抄）用法で、

……玉筥には 飯さへもり 玉盃に 水さへもり 泣
きそぼちゆくも 影姫阿婆例（武烈紀歌謡紀94）

のようなものをいう。該当する「を」の用法は、

き寝がには誰とも寝めど沖の藻のなびきし君が言待つ
我乎（萬11・二七八二）

のような例に見られる。但し、かつて述べたように、喚体
文としてのこの形式は、ゾに通うが、それも通して、一つ
の特質をもつていた。それは、詠嘆と称されるような、話
し手の内面へと深まる内省と内観において対象に対すると
いう感動喚体の一般と異なる對他性であった。右の例の場
合、言わば憐憫の対象たる自己に呼びかけるといった質を
見るのである。そのあり方は、

宇治川乎舟令^レ渡呼と^レ呼ばへども聞こえずあらし梶の
音もせず（萬7・一一三八「山背作」）

の「令^レ渡呼」にあつて顯著である。かつこの例で「氏河
乎」のヲが「渡せ」に続くとしても構文上問題視されるこ
とがあるように、格關係が分析的に明示されると言うより、
呼びかけている対岸の船頭に渡るべき川を指定するといつ
た提示の仕方を了解すべき語法であらう。「渡守船度世
乎」（10・二〇七二 七夕）が渡守に呼びかけているのに
対して、こちらは渡るべき川を提示していると言えるよう
な關係にある。「一ヲ、一ヲ」と繰り返すような音調であ
る。「呼」の用字はここに限らないが、少なく（六九、七
〇六、一七八七）、いずれも文末用法で、囃詞や感動詞に
似た用法である。

「あはれといふ心をふくめる詞」を上代の実例に即して述べた。

続く「後世にはをや」といふ脚に、これに似たる心のこれり」といふのは、

白河の滝のいと見まほしけどみだりに人はよせじといふものをや（後撰 一〇八七 中務）

のように、ヲに続けてヤと詠める（みだりに人を寄せ付けまいもの、ああ）場合を指している。更に「又うれしきかなや何々をと、文にかけるも、いにしへのおもかげある詞也」とするのは、

うれしきかなや、けふのまどみのやどもしみみにそひむれてゐたる事を……（散木和歌集九月「九月十三夜於前武衛泉亭詠閑見月、副隔一夜恋和歌」小序）

のような例を指す。

「乎家」に、まず原義とも言うべき意が説かれるのは、

「次にいふおもきを」など此心にちかし」と記されるように、ヲの用法全体を通してこれが本来的であることを示すためである。

二 「を」の軽重 1 「軽きを」

「何を」と条（項目）が立てられる下に、双行の注がある。

何は名頭脚引靡等也。上世には往をもうけて、おひをせれる、おほひをやすみなどよめり。中むかしより後はまれにみゆ。

ヲは、接続に関して、名、頭（挿頭）、脚（脚結）、引靡（用言連体形）を承けること、但し上世（上代）には「^{きしかた}往」（用言連用形）を承ける「おひをせれる」「おほひをやすみ」などの例を見るが、中昔（中古前期）からは稀であることが注されている。「^{きしかた}往」に続く二例には、少し解説を要する。二例はいずれも萬葉集卷二の例で、「打橋 生乎為礼流」（2・一九六）、「玉簪 覆乎安美」（2・九三）の七音句である。そして、オヒヲセレル、オホヒヲヤスミの両訓とも契沖『萬葉代匠記』の訓である。

オフルヲスレル（引用者注、旧訓）ハ、今按、オヒヲセレルトヨムベシ。古語ナレバセルヲセレルトハ云ベシ。スルヲスレルトハ云ベカラヌ故ナリ。

（二九六 精撰本）

長流（引用者注、下河辺長流）が老後にかけるには、おほひをやすみとかけり。用を跡にいひなして、ふたの事なり。おほふといふ用も（引用者注、旧訓オホフヲヤスミ）、ふたをおおふにて、おなじことなり。（九三 初稿本、なお、精撰本はオホフヲヤスミのま）

右のうち、「用を躰にいひな」すところの、つまり連用形名詞「おほひ」は、『あゆひ抄』の序説たる「おほむね」での規定では、「事のきしかたはいひかためて名となれる」「きしかた名」（おほむね下）であつて、「往^{きかた}」として承けているのではない。一方の「生乎為礼流」は難しい訓で、仙覚訓の「生乎為礼流」は、「生ふるを為れる」（生えることをしている）の意に取つたもの。契沖の言うように、これは語法としては違例で、「生乎為礼流」とした方が適っている。ここでも「生ひ」は往名であるが、但し生長のことを「生ひ」と言うことはなく、それが往を承ける例と見ることにつながつたのであらう。『萬葉代匠記』が無批判的に引かれてゐることは、成章の学として興味深い。付記すると「生乎為礼流」は、今日「生ひををれる」（はえなびいてゐる）と訓まれる。「為」をヲと訓むことに、誤字説（『童蒙抄』以下）、上の「乎」を繰り返す用法（全集）の二説をみる。「中むかしより後」の稀例も往名とは判定しにくい、つまり「いひかため」られたとは言えない往例を指すのであらう。

「二例」として、第一「かろ（軽）きを」と第二「おも（重）きを」があげられ、本論となる。軽重というカテゴリーは、緩急と共に伝統的なテニハ論の中で用いられてきた、切れ続きについてのもので、概言すれば、軽重は切れ

についての、緩急は続きについてのカテゴリーである。⁽²⁾『あゆひ抄』のなかに緩急の区別は見られないから、軽重はそれと特に区別されない、個々の用法の総合的な文法価値を指すのであらう。

まず「軽きを」である。

○第一「かろきを」といふ。里言同。これをそれをなどいふ詞、疑なければ、不^レ及引歌。但引靡をうけたるをば、【のを】と里すもよし。

「これを」「それを」などと言う用法であり、不^レ及引歌、證歌はあげられない。草稿と思しい「稿本あゆひ抄」（竹岡正夫の命名による）には、「花を見月をめづ^{これとそれ}」のように表示されている。言うまでもなく、今日格の概念を適用して対格の用法とされるものである。格概念の普及によつて、これは助詞「を」の基本性格とされ、通常ヲは格助詞に分類される。それを基底として助詞ヲを論じるところに大方はある。しかし、「軽きを」という位置づけはそのような内容を指さない。「軽き」とは、本来性の弛緩であらう。それが、右の後の付説と関わる。

【を】もじ入いらぬ詞の心得、此ついでに伝らる。今略^之

刊本で「今略^之」とされてしまったこの項は、「稿本あゆひ抄」に詳述されている。

ある人間ふ、「花見る」「月見る」とも、「花を見る」「月を見る」など、をの文字入り入らぬにも心ありや。答へて曰く、心なくはあるべからず。をの字入りたるは、花をしも見、月をしも見ると言はんが如し。をの字常に深き心あるにあらねど、をの字なきに比べて言ふなり。例へば「酒呑む」と言ひ、「文見る」と言ふは、をの字なきが常也。酒は呑まんにために醸み、文は見んために書くものなればなり。されど時ならずして、わづらふ人の酒を呑み、* 目なき人の文読まば、又をの字あるが常なり。又「酒呑む」とは言ふべく「酒こぼす」とは故なくば言ふべからず、「文見る」と言ふべく「文やりすつ」と故なくば言ふべからず。又（か）く心得置きて、これになづまらずして歌は見るべし。歌は五言、七言の限りあれば、文書くやうに法正しからねど、上下のうちあひて心となるものなれば、をの字あるべきがなきも、又入るまじきに入りたるもあるべし。されど全く心を用いざるはなし。たとへば今言ふかひなき者は、「夢を見る」「子を産む」など言へど、歌には「夢見る」「子産む」とのみあるを思ふべし。（適宜表記をあらためて引用、また*の箇所、文脈からして目を病んでいる人の意。）

やや煩雑であることが刊本に略された理由であらうか。

「を」の入らぬ場合、「酒呑む」のように「酒」と「呑む」の意味的な有縁関係が明確で、その場合、ことさらに「酒を呑む」のように言う時は何らかの理由があつて、例えば病人であるのに、特に求めて（頼む、せめてビールを吞ませてくれ、いやうがいただけでもいい）といった気合、飲酒に及ぶ場合だという。「花見る」「花を見る」のように併行的な場合、ヲの入る時は「花をしも見る」の意味で言うと言く。ただこうした有縁的なあり方とあらためた言い方との差は、歌のように緊張ある言語場ではよく注意されるが、弛緩した場では混用されることも説かれる。

ある自明さが、ヲの入らぬ場合にはある。書入はこのことについて、

ヲノ入（イ）ラヌハ、殊更ニワガ境トシテ持ニ及バナト、モタザレバ他事ニ混ズルトノ別アレバナリ。

と記している。「殊更に我が境として持つに及ばぬ」とは、「酒呑む」のように「酒」「呑む」の關係が自明で、酒をとりたてて言う（わが境とする）必要がないことを述べ、「ヲの入る」「花を見る」のような場合、花をとりたてないとそのことが際立たない（他事に混ざる）、つまり「花をしも見る」の意味にならないことを示す。今日これは格助詞ヲの対格用法として説くのが一般的であらう。ヲが明示されることとされないこととの差は、そこには示さ

れない。形態ということに即せば、ヲが存在しない形態をヲの用法として立論することは、矛盾的にも見えよう。しかし、格関係とは文における名詞と動詞の意味的有縁関係であつて、ヲがそれを表示しているというのは、ひとつの見え方でしかない。「ヲの入らぬ」形態はそれをまさしく示していよう。それは「軽きを」の中で、より軽い、言わば形式として零という方と言える。軽重が切れ続ぎに関する概念であるとすれば、切れと続きは、そこに小さい。では、そこに殊更な言い方であるとされる「花を見る」における殊更さとは、関係としてどのように規定されるのか、—という問いは、「重きを」の分析に還つて解かれねばならない。

三 「を」の軽重 2 「重きを」

○第二おもきをといふ。物をなるものをなどいふべきを、はぶきてをとのみよめり。一名をうけ、又あゆひにも名にかよふ詞をうくるは、なるをの心也。里【ぢやのに】といふ。二装をうくるはものをの心なり。又にともよむべきやうなり。里【のに】といふ。

「重きを」は、「物を」「なるものを」を「はぶき」たるヲであるという。二様が区別される。第一は、名を承ける

もの、またあゆひのうち名に通う詞（バカリ、ノミなど副助詞の類）を承けるもので、「なるを」の心である。これは里言、即ち近世後期の口語で「ヂヤノニ」と里す。第二は、装、つまり用言の類を承けるもので、「ものを」の心、また歌に「に」とも詠んで、「ノニ」と里す。「なるを」の心、「ものを」の心という謂から分かるように、「はぶきてをとのみよめり」とは、表現上の省略を言うのではない。意味的な資格においてそれぞれに相当することを指している。

證歌が二例ずつあげられる。第一は、

a 白露の色はひとつをいかにして秋の木葉をぢゞにそむらん
ヂヤノニ
 (古今 秋下 二五七)

b 露をなどあだなるものと思ひけむ我身も草におかぬばかりを
ヂヤノニ
 (同 哀傷 八六〇)

で、aが名を、bが名に通うあゆひ「ばかり」を承ける例である。また、aは句中、bは歌末の例である。第二は、

c 夕月夜おぼつかなきを玉くしげふたみの浦をあけてこそみめ
ノニ
 (同 羈旅 四一七)

d つひに行道とはかねてきゝしかどきのふけふとはおも

はざりしを

(同 哀傷 八六一)

があげられ、c が句中、d が歌末の例であり、c が「に」と置き替えられる(「おぼつかなきに……」)。

以上が「第二おもきを」に記されるすべてである。通常ここには接続助詞としてのヲが読み取られ、「第一かろきを」が格助詞であることと対比され、更には「平家」冒頭の、上古に「あはれといふ心」であつたという用法は、便宜間投助詞と分類され、整理は尽きてしまう。

しかし、この『あゆひ抄』の言説が伝授、継承される中には、別の観点があつた。上掲の書入には、右の證歌四例のヲの該当箇所、次のように傍書されている。

ヒトイロナラデハソムマジヲ也

a 白露の色はひとつをいかにして秋の木葉をちゞにそむらん

ソレヲチ、ニソムルハト也

b 露をなどあだなるものと思ひけむ我身も草におかぬばかりを

ソレニ露トハワケテ思ハル、ヨトナリ

c 夕月夜おぼつかなきを玉くしげふたみの浦をあけてこそめ

ソレニミタキ心アルハトナリ

d つひに行道とはかねてきゝしかどきのふけふとはおもはざりしを

ソレニ今死期ノイタレルヨトナリ

ヲを介して対立する二つをあげ、帰結部分の方を「ソレニ……トナリ」という決まった形式で示している。これは、一見併立的な二項が逆接関係で結ばれることを言うように見える。夕づく夜で視界がおぼつかない状態であることと、それに反して見たき心があること(c)などである。しかし、書入は二項が併立的でないことを更に解説する。「第二おもきを」といふ」とある右傍書に、

上ニワクル詞ノ正当ナリ。サレド此例ハソノ理ヲ推ス心ソヘリ。即チソノ理ヲ思ハスルナリ。

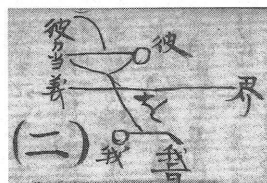
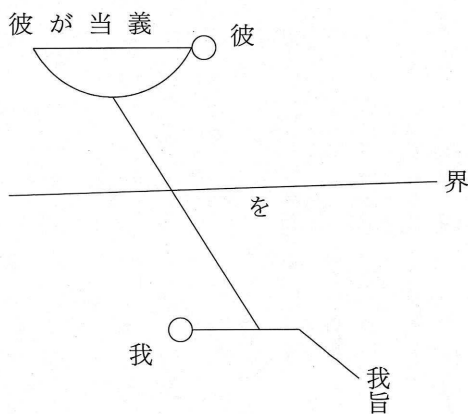
と記されている。「正当」にウラと振られていることについては、後述する。「正当・理」といった用語は「平家」の題目下に書き入れられている原義の解説が参考となる。語彙論的付会に見えて、なかなかの説である。

をハ物事正当ノ筋アル物ナルヲワガ旨トスル所ノ事ヘ引ツケ持テイフ心ナリ。彼ハ自然ノ正義アルヲソレヲ我旨ニツケ持ツガ故ニ、古来あはれト云心コモレルナリ。鳥ノ尾トイフモソノ飛ユカントスル場所ハ遠方ニハナレテアルナリ。デ、今コゝカラソコヲ志シユカントスル鳥ノ心ヘカノ場所ヲヒキツケテ持為ノモノナレ

バ、名ツケタリ。尾ヲモテ飛ユカントスル方ニ向フル故ノ名ナリ。

事象には自ずと定まつた本来的なあり方がある。「正当の筋」というのは、そうした概念である。それを「わが旨とする所の事へ引つけ持ていふ心」とは、主体が事象のそのあり方を自らの意識の妥当とすることとして意志的に選択し撰取することである。ヲはそこに働き、その故に古来「あはれ」の義が含まれていた、それをヲの本義としている。「あはれ」とは、その、彼の本来と自己の存念との一致不一致について「ながめる」(かざし抄) 感歎の声である。ヲの働きに關しての鳥の尾の例えは、語源論と見ないで読めば、秀逸である。尾は鳥の飛行にあつて方向舵であり、昇降舵である。そもそも飛行機の舵は、鳥の形体の模倣に始まつている。向かわんとするところへの飛行を調節する故に尾なのだという付合は、助詞ヲが、志向する対象を指定して、そこへと意志が言わば飛行する、その舵なのだということであろう。意志の志向する先としての対象を「我が旨」、つまり存念へと引きつけ判断する時、ヲはその対象を指し示すのである。

それは更に、上欄で次のように図式化されている。



自己の領域と対象界とが分かれたれ、自己と対象が対している。ヲは、その両界の「当義」と「旨」との關係的な交差点に位置している。右に解説したあり方の分かり易い図解であろう。なお、「彼が当義」という事象の本来性についての部分がふくらみをもった図形であることには後に述べるような意味がある。

図の左には、更に、

をノ上ノ詞ハ、物ナラバ正当ノ義ヲソレニモタセテをトウク。事ナラバソノ正当ノ儀ヲヤガテイヒテをトウク。下ノ詞ハワガ旨トスル所ノ事ナリ。

と説かれる。例解すれば、證歌 a で、「白露のひとつなる色」というのがその正当なところ、それを「を」と承けて、我が旨たる「葉を千々に染む」という判断を示す。また c で、「夕づく夜」は「おぼつかなき」とさながらに言っておき、「を」と承けて「あけてこそ見め（明けてから見よう）」と我が旨を言うとされる。

「重きを」の方にそうした釈義の本質が明らかだとして、上欄に更に記される。

おもきを 上ニイフ所ノ釈義此例ニテ殊ニ明ナリ。此ハ彼ノ本筋ナルコトアルモノヲコチラノコトヘツケモチテアルガ、サモ見エヌヲ以テソノ正当ナラヌコトヲをト云テ、本筋ノ理ヲサシオシテ云心ナリ。二例唯一

ナレド、かるきをハ此ノ心カクシタレバ、カヘリテカロク見ユルナリ。

「重きを」にあつては、彼の正当としてあるはずのことが、「さも見えぬ」即ち正当とこちらでは見えない故に、「正当ならぬこと」と判定して、それを「を」と言い、「本筋の理をさしおして云」、即ちあるべきことがらを推論させるとしている。

ここで、先の説明に還る。

上ニワクル詞ノ正当ナリ。サレド此例ハソノ理ヲ推ス心ソヘリ。即チソノ理ヲ思ハスルナリ。

「詞の正当」ではあるが「理を推す」、その時「正当」はただ見えているそれではなく、背後に理として推されてある「正当」としてであると注記されている。

四 釈義の適用

「おもきを」に即して、書入に示されたヲの釈義を見えてきた。それらは具体的に證歌にどのように適用されるであろうか。

まず a（古今二五七）。前述のように、露が一つの色なることが正当である。ただし、これを我が旨にもちいれ納めようとしても、そこに疑念が存する。一つ色であることが露の本来であるとしたら、それからどのように木の葉を

千々に染め上げられるのか。ここには歌語としての「白露」が関わる。歌ことばとして白くしかありえぬ露が、露が作用して紅葉する木の葉の、一つ色とはうらはらな千変万化の色として現出することが疑われ、「白露」たる一つ色に変幻が内包されているというウラとしての正当の故に千々に染めるといふ理が推論されることになる。

次にb（古今八六一）。我が身と露との違いは草の上にあるかどうかであつて、本質的にあだなることは両者同じであることあらためて知るといふ内容の歌である。露はあだなるものだという本筋がある。それを了解する我は、自身をあだなるものと自覺していない。しかし、露のみがあだであるかという疑念は、我との差は、草の上にあるかどうかであるかという見え方を成立させる。そこをヲと指して、我も露と同じくあだなのだという理を推論し、自覺する。

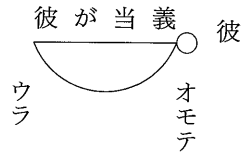
第三證歌c（古今四一七）「ふたみの浦」は名所である。フタミは「二見」かとも推定されるが未詳。しかし、「ミ見」を含む語である故に、見られることが本来である。しかし、「夕月夜」（七日頃までの、夕方出る月、入りが早く夜半までに闇が訪れる）である今、その景色はおぼつかない。その「ミ見」なのに見えにくいという正当ならざること（ウラ）にヲと言つて、それなら、フタ（蓋）だからいつそアケテ（開けて―明けて）、夜が明けてから

見るとよいという我が旨の理の推論へと導く。枕詞「たまくしげ（玉櫛笥）」は指辭以上の働きをしている。

第四證歌d（古今）は在原業平の歌として知られた歌。誰しも死期は分からぬものである。これがオモテの正当。だからいつかは訪れる「つひに行く道」であるとは分かっている。でも差し迫つて考えない。しかし「やまひしてよくなりける時」（詞書）、それが昨日今日のことと思われるようになつてきた。これがウラの正当。そしてそこから死期が迫つていふという理が判断される。

これらにおいて、をと指定されるのは、意志が敢えて志向するところの対象といふことがらである。先の図式において「彼の当義」が幅とふくらみをもつて表示されていたのは、ここに正当といふ事象のあり方に本来的なそれと、本来に反して背後的なそれ、「正^{ウラ}当」とがあることを示すものと考えられる。オモテという用語は見えないが、前者本来性の側に対照的に与えておくと、該当箇所は次頁の図のように表示されよう。

「重き」におけるヲが「彼が当義」のオモテとウラに關わつて対象としてのことがらを指すものであるとすると、事象におけるその表裏二つの区分は、「軽き」には及ばないのであるうか。次にそれを考える。



五 「輕きを」の二態

「を」もじ入らぬ詞の心得」において、説かれていたのは名詞と動詞の意味的有縁性の濃淡であつた。「酒呑む」が一般的であるのは、「酒」というものの本来性、即ち正當と、「呑む」という主体の、この場合行為即ち旨とが直接的に結びつくからであつた。このことは必ずしも対格という現象に限定されない。むしろ、非対格の言い方と言えはすぐに取上げられる「湯を沸かす」の場合でも
さし鍋に湯沸かせ^レ湯和可世^ト 子ども櫛津^{いかり}の桧橋^{ひはし}より
来む狐に浴むさむ

(萬葉16・三八二四 長忌寸意吉麻呂)
の例が如実に示すように、「湯沸かす」のような「ヲ文字入らぬ」例が早くから検索されよう。類似の語法に「宿を

借る」がある。家や部屋を借りて宿とするのであるから、「宿を借る」は対格とは言えない。次の対比は、先の「稿本あゆひ抄」の説明に沿う。

狩りくらしたなばたつ女に宿からむ天のかはらに我は
来にけり (古今 羈旅 四一八)

夕日さす浅茅が原の旅人はあはれいづくに宿をかるら
ん (新古今 羈旅 九五二)

「宿を借るらん」とは、故あつての、敢えてのこととしてある。

そこに二つの類別が存している。正當であることが、あたかも困難なことであるかのような言い方、それが「(敢えて)宿を借る」であろう。とすれば、次のような表現に示される助詞ヲのあり方も明らかであろう。

池中の水を湯に燂^{わか}し衾^{ふか}を以て浴せしむ。

(鈴木牧之『北越雪譜』初編 天保七年(一八三六)
問 水をわかせるヲユトナツク如何

答 ユハ湯也 イツヲ反セハユトナル出也 コレハ温
泉ノ心ニキコユ 湧出ノ義也

(経尊『名語記』二 文永五年(一一六八))
実例はいずれも特に水と言うことが言及される必要をもっている。水はここで敢えて求められる対象である、とすればこれは「重きを」における「正當」に相当するのでは

ないのか。「湯を沸かす」「穴を掘る」「セーターを編む」式の言い方は、正当のオモテであつて、ウラたる水、土、毛糸といった素材や材料等の対格対象の項目は、こうした日本語に特徴的な表現の中で、実は背後的な項目であつたと言えよう。

こうした日本語表現は、文法家の記述の外で、本質のみを受け継がれている。

あの頃 ぎぼうしゆとすげが暮れやすい花を咲き

山羊が啼いて 一日一日過ぎてゐた

(立原道造「燕の歌」)

「花を咲く」は、通常の日本語表現では違例とならう。

しかし、意味は明らかである。ただこの場合、対立する「水をわかす」に相当する一方が示しがたい。「つばみを開く」が考えられるが、「つばみ」の語は成立がおそく、三尺ばかりなる桜のつばみ半ばひらけるあり。

(松尾芭蕉『奥の細道』「出羽三山」元禄一五年へ一七

〇二)

に見られるように、「花のつばみ」と用いる連用形名詞であつたためであつて「つばみを開く」はなじまない。

灰の中に母をひろへり朝日子ののぼるがなかに母をひろへり
(斎藤茂吉『赤光』「死にたまふ母」)

拾われる骨が母の換喻ないしは提喻であるというのは、半ばの答であらう。「母」は、死者という新たな存在として対され、出会われている。

注

(1) 小稿「係助詞ゾの終止用法―喚体性と述体性をめぐって

」(『ことばとことのは』第八集 和泉書院 平成三年二月)

(2) 小稿「『てには網引綱』上巻に見られるテニハ論―その先進性と限界―」(『科研費報告』中・近世日本文法学の再評価と体系化』平成九年三月)